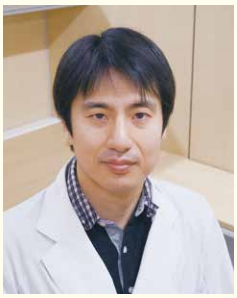
健康通信

～小牧市民病院より～

あまり知られていない母子感染症とその予防



小児科部長医師
本田　茂

妊娠中に注意すべき感染症の中で、妊娠中のスクリーニング検査は行われていないにも関わらず、赤ちゃんに重大な影響を与えることがあるサイトメガロウイルス、トキソプラズマ、リステリア菌について紹介します。

サイトメガロウイルス

日常環境にいるウイルスで、母子感染の原因で最も高頻度と言われているウイルスです。10年ほど前の日本の調査では、300人に1人が先天感染を起こしていると報告されました。多くは妊娠中の初感染により母子感染を起こします。抗体を持っていない妊婦さんは30％で、昔よりも増えています。ただし、抗体を持っていなくても母子感染を起こさない例も多く、抗体を持っていなくても妊娠継続を諦める必要はないとされています。さらに、抗体がある妊婦さんでも1％程度母子感染を起こします。赤ちゃんへの症状は、胎児発育不全・難聴・小頭症や脳の異常・肝機能障害・網膜脈絡膜炎などです。2018年4月から、疑い例には確定診断として生後3週間以内の新生児尿検査が保険適応となりました。先天性サイトメガロウイルス感染症と診断されれば症状の進行を抑える治療もあります。このウイルスは唾液や尿で感染するので、オムツ交換や子どもの鼻汁・よだれをふいた後にはせっけんと水でしっかり手洗いをする、子どもと食器を共有しない、子どもとキスをしない、ことなどが大切です。

トキソプラズマ症

生肉や洗浄不十分な野菜の摂取、猫の排泄物や土いじりが感染源となるとされている原虫です。妊婦さんに初めて感染した場合に問題となります。日本での妊娠中の抗体保有率は2～10％ですが、実際に母子感染を起こし、症状が出るのは1万人に1人程度です。症状は、脳・視力の異常の他に、出血症状や心不全などがあります。赤ちゃんへの治療薬は通常の医療機関では手に入らないため、専門機関との連携が必要です。

リステリア菌

流産・早産・死産の他、新生児敗血症や髄膜炎の原因となる菌で、殺菌されていない牛乳（搾りたての牛乳）、乳製品、カマンベールチーズなどのソフトチーズ、スモークした魚介類、サラダなどが感染源となります。冷蔵庫でも繁殖し、加熱することで予防できます。

いずれの感染症の予防も、体液に注意し、手をよく洗い、しっかり加熱したものを食べることが大事です。

小牧市民病院では、上記疾患の新生児の他にも、院内出生・院外出生に関わらず、早産児やその他疾患の新生児にも幅広く対応しています。

問合先　市民病院（☎76・4131）